

## 第4章

# その他のAgile方法論

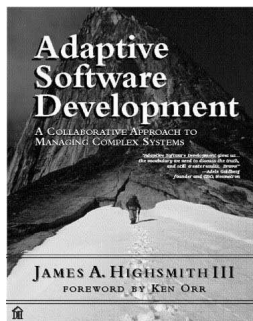
## 変化への対応を重視するXPとASD

### XP

XP (eXtreme Programming) については、現在「The XPシリーズ」として、入門から実践まで書籍が出版されています。話題性もあり、知名度は相当なものです。

XPは、Agile系開発方法論の代表的選手であり、現時点での注目度・有名度はNo.1です。日本語の文献も多く、入手も容易なので、今回はXPの紹介は割愛しました。

XPの認識が広がる一方、「プロジェクトへのXPの導入を考えてはいるが、未だ検討中の域を出ない」とか、「関心は高く期待も大きいですが、不安があって導入に踏み切れない」という方も少なくないと思います。



Jim HighsmithによるASDの書籍  
『Adaptive Software Development』  
(Dorset House, ISBN0-932-63340-4)

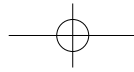
不安が存在する1つの理由として、XPは日本では話題が先行しており、具体的な効果を示す客観的な計測データや導入事例が極めて少ないということがあります。したがって、XPについてはその効果を示す定量的なデータや適用事例に関する情報が期待されますが、この内容を扱った書籍が出版されています(22ページのコラム参照)。

### Adaptive Software Development

Adaptive Software Development (以後ASDと記述)は、Jim Highsmithによって、1990年代中頃に提案されたソフトウェア開発方法論です。

Highsmithは、伝統的開発方法論が、最近のソフトウェア開発を取り巻くビジネス環境の複雑さや、激しいまでの早い変化に適応できないという結論から、ASDを提案するようになったと述べています。この点は、他のAgile開発方法論と同様の見解です。

ASDは、速いスピードと激しい変化が特徴のITビジネスのためのソフトウェア開発方法論として誕生しました。Highsmithは、ソフトウェア開発とソフトウェア開発市場に関して彼が意識している根本的な前提を、「複雑系適応システム理論」を用いて説明しています。



# 特集1 ● Agileなソフトウェア開発

変化に迅速に対応できること	リスクドリブン開発
開発プロセスの手順より、製品に注力すること	タイムボックス的なアプローチ
離れた場所で開発しているチーム間のコミュニケーションを可能にすること。これには効果的なToolを利用する	使用技法は限定しない。状況に合わせて最適な技法を用いる
反復型開発	最適化されたシステム開発を目指すことより、Good-enoughなシステム開発を意識する

表1 ASDの主な特徴とコンセプト

さらにHighsmithは、ASDについて、「収穫通増（ていぞう）」が成り立つビジネスドメインでの開発方法論であるとし、今までのビジネスとはまったく異なるITビジネスのような新しい環境では、それ以前の環境を意識して定義された開発方法論では対応できないことを力説しています。

そして、誰もが予想困難なほど複雑で、変化の早いビジネス世界の要求を満たすシステムを作成するのは、ビジネスの変化に常に対応した開発が不可欠であると考えています。この場合、開発中であっても、ビジネスの変化への対応が必要であるなら、要求変更を取り入れるのは、システ

ムの宿命上当然である、と結論づけられています。

ASDは、開発の理論的基盤を複雑系適応型システム理論（CAS：Complex Adaptive System）<sup>注1</sup>に置いています。CASは、カオス的な市場の複雑さを説明することを試みている理論です。

Highsmithは、カオス的な振る舞いをする市場動向では、「最適化」することから得られる利益よりも、「柔軟に対応できる」ことのほうが重要であると説き、CAS理論をそのままASDに持ち込み、開発プロセスの基盤となるモデル化を行っています<sup>注2</sup>。 ■

注1) Holland1995.

注2) 参考文献2.

## コラム：XP関連書籍の紹介



XPの応用、発展的な適用事例や研究データを紹介した書籍として、『XPエクストリーム・プログラミング検証編』を紹介します

（Giancarlo Succi他著、小野剛他訳、ピアソン・エデュケーション、ISBN4-8947-1542-2）

内容は、非常に多岐に渡るテーマが取り上げられており、XP利用者以外でも興味深いものとなっています。また、参考文献の情報も充実しています。XPの効果に対して懐疑的である方や、開発現場への導入に不安を感じる方には、多くの興味深い情報が掲載された一冊です。

また、直接XPの導入を検討していない方も、ソフトウェア開発やプロジェクト管理の大変有効な

情報を得ることができると信じますので、一読をお勧めします。

本記事の「価値体系」は、この文献を基盤としています。

1. 階層的XP：大規模プロジェクトへのXPの適用
2. XPと大規模分散ソフトウェアプロジェクト
3. ソフトウェアメンテナンスの統計的モデルとXP
4. ペアプログラミングのコストと利益
5. XP流レガシー etc.

